

結びの言葉

以上拙文を以て纏述し來つた著者今日に至る迄の想ひ出の數々は拙文故に盡きぬ感が深い、尚ほ色々述べたい事もあるがあまりに長くなつては讀んで下さる諸士に對しても相済みぬ次第であるが、巻後回顧する時、著者の半生は全く幾變遷を経てゐる、そしてそれが國家材界に及ばした功罪に至つては、著者自信が省ふ苦難の過去に比して何等とり立てて云ふべきものなく、唯々自己の力と學識の足らざらしきを憾むのみである。

然し著者半生の人生行路難の諸相は巻頭に述べた如く、これから伸び伸びとした人世の春に逢ひ、豫測する事の出来ない苦しい山阪を幾度か經て行かねばならぬ若い人々が過ちを避けて中庸の道を進むべき好参考となり、刻苦精勵大成される楔にともならば望外の喜びとする處である。

以上蕪辭を連ねて結語とす。

昭和十二年六月

附録

香港・中南支遊行記

私は一兩年前から香港、中南支地方へ旅行をしたいと思つてゐたが仲々機會に恵まれず漸く店務其他公職關係に餘暇を得て昭和十二年五月廿二日午前八時十五分關西線で名古屋を出發した、大した旅行でもないのどこっそり出掛けるつもりであつたが、驛頭には親戚、知友三十名餘りの見送りを受けて仲々賑やかだつたし、畏友神野鑛逸君が音頭取りて萬歲々と壯途を祝つて下さつたので思はず顔が熱つて同時にわけもなく目頭らが熱くなつた。

乗船豫約の加茂丸（郵船濠洲航路船）は名古屋、大阪、神戸と經て長崎を廿四日に發つのでその都合上私は大阪、神戸で商用を濟し廿四日長崎へ到着したのであるが、船の豫定が一日遅れたゆゑ長崎で一泊して、廿五日市内を見物旁々長途の一路平安を祈る爲、諏訪神社に參詣して御祈禱を受けた、祈禱の先客があつたので待合す裡に刻々乗船時間が切迫する、終へて早速自動車で波止場へ駈けつけてみると出帆の銅鑼が鳴つてゐる、取るものも取りあへず解で本船へ急ぎブリッチを駈け登つて豫約の一等室へ落ち着いた、そこで失

敗をしてゐるのに氣附く、それは乗船時には水上警察署でパスポートに認をしてもらはねばならぬのだが、その時間が無かつた爲に認めをもらはずに乗船したのであつた。止むを得ず乗船官吏に認め方を依頼したが陸上でないと出来ないとの事である、この認め云々は戻つて來てから乗船地の警察でやかましい事となるので困つたが乗船官吏のとりなしで航行するを得た、先づこゝで赤毛振りを發揮したわけである。

一等船客の九割は外人で日本人は數名である、そして香港に上陸するのは私一人で他の人々はマニラ、メルボルン方面へ行く人ばかりであつた。日本人の乗客は

貴族議員醫學博士 男爵 高木喜寛氏（帝大教授）

（マニラ在住フランス婦人の直腸癌手術の爲特に招聘されて（マニラでは外國人醫師の手術施療等を禁止してゐるが直腸癌の権威たる氏を特に招聘されたのである）六週間の豫定で渡比されるのである、同氏はマニラで極めて好結果の手術を施こされて日本醫學界の爲に萬丈の氣をはき六月二十二日氷川丸で歸朝された）

騎兵中佐 岡田親秀氏

（陸軍省の命に依りシドニー、メルボルン、ニュージールランド、南米各國を経て大西洋岸に出てニューヨークへ行き大陸横斷してシャトルより歸朝、約六ヶ月の豫定で海外視察に赴かれるのである）

大日本ビール技師 吉田憲介氏

（大阪貿易がマニラにビール會社を設立するので技手數名（二等船客）を引率して建設の爲に派遣されて行かれる）

教師 黒澤敬一氏

（マニラの日本人學校より招聘されて先生として赴任される）

前述の様に一等船客の九割迄が外人ばかりなので吾々は自國の船に乗りながら何となく肩身狭く暮さざるを得なかつた、サービスも全く外人本意となつてゐて不愉快な氣持を抱

かせられた、高木博士は海外生活十二ヶ年の経験を持つてみられるので凡て伸び伸びとした船中生活を送ってみへたが吾々赤毛布は自らを卑下してゐた點もあるだろうが外人本意のサービスの環境裡に多少縮こんだ生活を送らざるを得なかつた。船長の話に依れば何時の航海でもこうした状態で外人客が多いので勢ひ外人本意にしなければならず、日本人の海外發展力が如何にも微弱であるのを平常殘念に思つてゐるとの事であつた。

長崎出帆以來晴天の日なく、霧が深く、而も加茂丸は臺灣海峽を通過せず臺灣の東側を南下するので四面見るものもなく、結局船室に閉ぢこもつて本店、支店、滿鮮地方出張中の宮崎社員との間に盛に電報の交換をなし内地、滿鮮各方面のベニヤ板、厚木其他商況の推移を知ることが出來た。

船は一路故障なく南下して五月二十九日朝香港の對岸九龍(Kowloon)の郵船波止場に安着した、埠頭には香港八達公司の蒙主人、揚支配人、並に先着の日神海運商會名古屋支店長日比野幸盛氏諸氏が出迎へてゐて下さつた。船上から眺めた香港の景況は實に立派である、ビクトリア・ハーバー(Victoria Harbour)には英國の軍艦、其他各國の商船が碇泊してゐる。神戸をもう一廻り大きくした感じである。要塞地の兵舎は何れも堂々たる

立派さで且つ華美で質實剛健と云ふ氣風は見へない。

旅券の査證と檢疫を受けて解で九龍の波止場から香港へ渡り上陸するのである。吾々が解で着いた香港の波止場の隣りが商船波止場であつて、例の南米移住の同邦を乗せた堂島丸の爆發椿事は此處で惹起されたのであつて、吾等は雄途空しく異郷に散り行きし同邦の靈に對して冥福を祈らずには居られなかつた。

香港上陸と共に警察署で旅券を示して上陸届けをなし承認を得て、宿舍たるアイスハウス街(ice House Street)の松原ホテルに旅装を解いた。小憩後楊氏の案内で市内各所を見物したが大厦高樓、結構の美は下手な文字で粉飾するより巻頭の寫眞で御紹介しておく。

木材業關係の視察をしたが先づ第一に目についたのはボルネオ産南洋材の原木、板子、カポールの板子、原木、チーク材(三等品級)其他種々なる木材が各材木屋の店頭、土場に置かれてあつて、その裡支那政府の國產獎勵に依る福州の杉、松等が多數取扱はれてゐるのが更らに特に目をひいた。大體の業態は内地の業者と比べれば規模は小さいが、こじんまりとした商賣を續けてゐる。ベニヤ板も夫々取扱はれてゐるが大部分私共(大江合板

株式會社製出)の製品が陳列してあって非常に愉快であった。

流石は老英國の租借地だけに大陸的氣風で、要塞地の撮影等は禁止の高札が麗々しく掲げられてはゐるが撮影したいがどうかと巡邏の警官(印度人)に尋ねると三脚を使用することはまがりならぬが唯々寫すだけならかまはぬと至極鷹揚である。

夜の香港は亦格別である、九龍方面から眺めた夜景の美しさはチョット形容の言葉がない、その夜私共は蒙氏の御招待で金龍と云ふ支那料理家で純粹の支那料理を味ふ事が出来た、山海の珍味とはこの事を云ふのであつて純粹の支那料理のうまさは内地では本當に味はくれないと思つた、然し吾々菜食の國民はこれを主食としては油濃くてやり切れないのだが時たまの攝取だからたまらなくうまい、支那美給の仲々の愛想よいもてなして時の移るを忘れ、眞夏の夜の微風が心持ちよく酒樓の窓邊から入り、じっとり汗ばんだ肌をくすぐる。

夕餐後ホテルへの歸途ダンスホールへ寄つて多勢の人々が歡を盡して踊り戯れる様を観察した。

翌三十日朝、ホテルで同行の日比野氏と今後の旅程や八達公司へ提出のオファーに就て色々打合せをなし、蒙氏、揚氏の來訪を受けて後自動車にて宿より南方約四里の裏ホンコンとも云ふべき場所にあるホンコンホテルの別荘(The Repulse Bay Hotel)へ案内され、ドライブを試みる、同ホテルの様式は巻頭掲載の寫眞の様にその規模は帝國ホテルに似てゐるが、到底比ぶべくもない、壯麗、華美である。ホテルの前庭は更らに海邊に連り海水浴が出来る、テラスから眺めた花園の美しさ、太陽の輝かしい光に照り映へる緑の芝生等ホンコン第一流のホテルの名にそむかぬ。尙ほ視野を擴げればホテルの南方海上にミッドル島(Middle Island)が繪の様に浮びその先に東ラム海峡(East Lamma Channel)を距てラムマ島(Lamma Island)がどしどしとひかへてゐて丁度和歌山縣紀井三寺の前庭から淡路島並に遠く四國の諸山を望見するに似た明媚な風光で、南國特有のゆつたりとした氣分にひたる事が出来る。

丁度日曜日の事とてホテル前の濱邊は大變な賑ひで外人連が盛んに海水浴を楽しんでゐて、ビーチパラソルに憩ふもの或ひは夫婦が腕を組み合つて水へ飛び込むもの、兎も角兒戯に等しい有様を呈してゐる。

ホテルでは午後ティーダンス(Tea Dances)が開かれるとの事であつたが私は中食後口

ーヤルホンコンゴルフクラブ (Royal Hong Kong Golf Club) のクラブハウス、コースを視察して引返へす事にした、同クラブはホテルから歩いて數分で行かれる處にあって、ホテル宿泊のエトランゼーが多數、ゴルフに打ち興じてゐた。

自動車で海岸通り (Bung) 迄引返した私達は今度は同じく自動車でピークトラムウェイ (Peak Tram Way) の終點迄ドライブを試みた。トラムウェイの終點迄は急阪の連続であつて、右に左にドライブウェイは曲りくねつて登るに従つて益々急である。神戸の街から六甲へ登るに似てはゐるが道路の素晴らしさと急なことは比較にならぬ程すごい。丁度トラムウェイの終點へ登りつめると眺望は愈々托けて九龍の街が眼下に黒ずんだ姿を見せて、一方東ラムマ海峽、西ラムマ海峽 (West Lamma Channel) が清翠な水をたゞへて、小帆の漁船が小さく浮んで見入る。自動車を乗り捨て、私達 (日比野氏、揚氏と私、蒙氏は車で待つてゐる) は頂上を尾根傳ひにあちらこちら散策した。ビクトリアピーク (Victoria Peak)、ハイウエスト (High West)、マウントキヤメロン (Mt. Cameron)、軍事療養所 (Military Sanitarium) 等を見て廻つたがかなり疲れた。歸途はピークトラムウェイで降つた。このケーブルカーは六甲の様に垂直でなく斜線的にS字型を書いて上下してゐてス

ピードは猛烈に早い。

そしてホテルで夕食をとり夜の香港の街を見て歩いてその夜の十時英國汽船のシャッター號 (SS Shatter) に便乗して廣東 (Canton) へ向つた、船はビクトリアハーバー (Victoria Harbour) を右に、ランタウ島 (Lan Tau Island) の右側 Kap Shui Mun Pass を通過し救河 (Kant on River, Quiki ang) を遡上して九十哩翌日の午前六時廣東 (Canton) の波止場へ着いた。

まづ河岸に碇泊してゐる日本軍艦吳竹、若竹の勇姿に云ひ知れぬ心強さと畏敬の念を覺へた、廣東市は香港と比較すると何となく田舎じみて居り市内の様子も雜然としてゐるが、道路はかなり整つてゐたし、河岸通りには大厦高樓軒を列べて堂々たるものである。廣東は例の十九路軍の發祥の地だけに排日、抗日の本場であつて、市中の勢力は英國人が第一で邦人は在留者數も少ない關係か微力のように感じて遺憾であつた。

新亞ホテル (New Asia Hotel) で朝食 (早餐) をとり、食後中山大学、中山記念堂、其他を見物すべく自動車で出掛けた、中山大学は面積十七萬坪、文學院、法學院、女子大學部、女子寄宿舎等が既設され其他の各科學院は目下建設中である。吾々が視察で特に異様

に感じたのは學校正門前に機關銃が据へられてゐた事で、文化の殿堂に迄こつした施設をしなければ何事も晏如たり得ない隣邦國の諸情勢を淋しく感じた。次いで七十二烈士の墓十九路軍記念碑等を見物したが何れの碑石にも抗日、失地恢復云々の文字が刻まれてあつて極めて不愉快である。その近くの軍官學校では式典でもあつたらしく分列式を舉行してゐたが支那が將來力強い國家たらんと努力してゐる様子がうかゞわれた。その後五層樓へ行つた、小高い丘上にあつて仲々ガツシリした威容を誇つてゐる。内部は博物館になつてゐて色々な物品が陳列されてゐたがわけても抗日の爲の陳列物などは特に吾々の目をひいた。五層樓を出て孫文記念堂（中山記念堂）を見学したが鐵骨コンクリート破風造りの廣大なる建物であつて、内部は公會堂式で色々な會合が出来る様になつてゐる、三百五十萬ドルを費したゞけに裝飾、器物は結構の美を盡してゐる。

中山堂を辭してより六榕寺花塔を視察した、外觀は八層となつてゐるが内部は各層が二階となつてゐて十六階である、それを上まで登つたが丁度内地の七月中旬頃の氣候で炎暑厳しく流汗淋漓となつてせつせと登る、内部には夥しい佛像が安置されてゐて五百羅漢堂を順拜するに似た何となく敬慮な氣持ちとなる。

市街へ戻つて晝食をとり、少憩してから木材業者數軒を視察訪問した。大體に於て香港と大同小異であるが何となく田舎じみてゐる、こゝにも大江合板のベニヤ板が八達公司、三井等の手で送荷せられ店頭に陳列してゐるのを見かけた、將來は尙ほ相當ベニヤ板等も多く消化せられるであらうと觀測した、業者訪問の途次八達公司の支店である德鱗行へ寄り清談を交へる事が出来た。

斯くして廣東に於ける視察を終へて午後五時廣東發九龍行の汽車に（廣九鐵道 Canton Kowloon Railway）乗るべく驛へ急いだ、發車時刻より十五分程後れて汽車は出發し

た、列車の前には前驅車が走つて鐵路を調べながら行くのである。この鐵道は英人の支配下にあつて全てが英國式である。途中に四川と云ふ處で賭博を公認されてゐて最近禁止になつた小驛があつて宏壯なホテルの廢墟が軒をならべありし日の榮華の名残を止めてゐた、この驛から南方は榮國の租借地であつて鐵道線路も完全して動搖少なく従つて速力も倍加されて氣持よく九龍へ急ぐ、午後八時半九龍驛到着する。早速私共は八達公司の蒙主人初め社員一同を日本料理家の千歲樓へ招待して一夕の清宴を張つたのである。翌六月一日午前中は香港市内見物をなしホテルで八達公司の諸氏と將來の取引上に就て研究懇談を

重ね日支商取引上益する處があつた。午後は金龍で御別れの宴會を開いて名残りの香港の夜を充分エンジョイした、午後十時には秩父丸に乗船、船でも亦大騒ぎをやって午後十一時半頃漸く寢についた。

六月二日早朝六時秩父丸は九龍の波止場を迂る様に出帆して一路上海へ向ふ。午後からは風が出て波が高く流石の秩父丸も動揺が激しい、終日船室に閉ぢ込もつて色々書類の整理や讀書をして暮す、翌三日も海上は荒れ模様で動揺がひどい、船室で暮すより他に方法がない、夜に入ると動揺も鎮まり午後八時頃からトーキーの映寫があり仲々賑やかであつた。四日朝漸く海水が黄色を帯び来り揚子江近しを思はせる、江口が見へ初める頃黄色の濁流は益々濃くなる、上海事變で有名なる吳淞 (Wosung) の砲臺を右手に見つゝ黄浦江 (Wangpoo River) を遊行して午前十一時郵船波止場に安着する。

碼頭には上海野村公司の荒巻氏、池田氏等が出迎へてゐて下さつて御案内で同行の日比野氏と共に萬歳館ホテルに入り旅装を解いた、ホテルで中食後野村公司の自動車で市内各所を見物すべく先づ内上海へ視察に行つた。

上海は衆人承知の國際都市である。市内の殆ど大半は列強の共同租界、佛蘭西租界とて占められ支那自身の勢力の及ぶ處は僅かに猫額の地のみである、そこで最近より自分の支配下に置くべき街を建設すべく黄浦江下流の舊上海市に接續する地に先づ道路網を完成し住宅を建築し、電氣、ガス、水道等文化的施設を整へて中央に市政府を置き之を内上海と稱して、市行政はこゝにおいて司掌し、支那官吏は全て強制住居を命ぜられてゐる、舊上海市からは内上海行の定期バスが運轉されてゐる。

市政府の前で著者は豫て聞知してゐた集團結婚式の有様を見る事が出来た、支那では結婚式となると少なくて數千圓多くは數萬圓の費用がかかるのが普通となつてゐた、こうした冗費を省くために十數組或ひは數十組一纏めの結婚式を擧げさせるのであつて、廣東で感じたと同様に支那が將來立派な國家たらんとして遠大な計畫の許に諸施設を行ひつゝあるのだと思つた。然し短期間の爲支那魂までは知る事が出来なかつた。

翌日は上海の郊外西南方龍華 (Longhua) にある龍華寺へ日比野氏、野村公司社員と同行で參詣に出掛けた、上海南站停車場より滬杭甬鐵道 (Shanghai Hangchow Ningpo Railway) で八時半發車、八時四十五分龍華着。龍華寺は立派なお寺で樓門、五重塔、本堂、奥ノ院全てが支那中世期の文化華やかなりし頃の佛を残して古色蒼然たるものがあり、七堂

伽藍の雄大壯美は全く筆紙に盡し難い。堂宇内部を巡拜すれば四天王、十六羅漢、布袋、釋迦牟尼如來等種々の佛像が安置されてあつて、内地の大寺へ參詣するのと同じ敬處な氣持を抱く然し掃除が行きとゞいてゐないから何となくコミコミしてゐるし、日本の僧侶と同じ服裝の坊さんがつきまといつて寄附を強要するし、乞食がゾロゾロつき従つて全く不快で、折角の參詣に來た敬處な氣分も打ちこはされてしまふ。午後五時頃上海ほホテルへ歸る、午後六時には歸朝中の野村公司の社長野村久一氏が來滬されるので出迎へる、野村其氏他の諸氏と歡談を交へ、佛租界にあるキャニド・ルーム (Cano Room 逸國、犬の競争場) へ見物に出掛ける、途中福州路 (Fochow Road) の梅園酒家 (Merry Garden Restaurant "Mayune") で純上海料理 (特式時菜) を食べた、然し吾々日本人はごつても日本料理の淡菜が戀しくなる、長崎出帆以來船中でも香港でも全て西洋料理と支那料理の連續で、勿體無い話しだが支那料理もチョット鼻について來た。キャニド・ルームの盛さは想像外である。甲子園野球場位の廣さで周圍のスタンドは全て有蓋になつてゐて數萬の各國人色とりどりの觀衆が競犬の一擧一投足に血眼になつてゐる。スタンドに腰をおろすとむせかへる様な人いきれと、ものすごいどよめきに、もうポーツとなつてしまふ、

そして「代客買票員」と云ふ狗票 (犬券) の代買をする丁度競馬の豫想屋といった連中が盛んに買票をすゝめに來る。この代客買票員と云ふのは胸にマーク、番號をつけ、制服を着用して、急がしくスタンド内を右往左往してゐる。

第一レースから第九レース迄あつて三百碼、四百四十碼、五百碼の各普通レース (平賽) と五百二十五碼のハードルレース (跳欄) 等が行はれる。著者は三レースを見ただけで外へ出た、素人の事とて買票はしなかつた。逸園外のスタンドの周圍には自動車は何百臺と云ふ程横づけにされてゐる、その種類の雜多なのに驚いた、ボロボロのフォードからロードスター、ロールスロイス等の高級車迄何十種類と云ふ自動車の陳列でこれを見て廻るだけでも仲々面白いと思つた、ホテル迄スピードをスロウにして街景を見物しつゝ歸る。

翌六日早朝起床、日比野氏と色々打合をなし野村公司の支那人社員の家内で杭州 (Hangzhou) へ出掛ける事にした、上海北站停車場を八時二十五分發の急行で杭州へ向ふ

(Shanghai Hangchow Ningpo Line Chinese National Railway 中華民國國有鐵路=

滬杭用 上海 杭州線) 南京行の急行も相前後して出發した。途中松江 (Sungkiang)

嘉興 (Kashi ng) 硤石 (Yehzoh) 長安鎮 (Changant seng) 等の大驛を過れし十二時二

十八分杭州へ到着した。車中日本人はおそらく著者と日比野氏だけであつたらうか支那憲兵、支那巡警がウルサイ位に取調べる。思いなしか彼らの目がキラキラ光る様だ、杭州驛へ着いて再び憲兵、巡警の取調べを受ける。十数名の彼等が吾々を取りまいてダラリと下げた手にピストルを抜き身で持つてゐて物騒である、が度胸は坐つてゐる、微笑を浮べつゝ平然と彼等の取調べに應じる、二十分位たつてやっと彼等の圍みから開放された。杭州府は古い都であるので例の城壁で圍まれてゐる、驛から自動車で艮山門と云ふ城門をくぐつて城内へ入ると車はグンとスピードを増した、スロウではどうも危険だと云ふ、どんな古都へ行つても、どんな街でも排日氣分が旺盛で全く困つたものだ、自動車で見物をしてゐるとどこから飛ばしたのか母指頭大の石が車内に投げこまれ案内の野村公司の支那人揚氏の額にあたつて著者の胸をかすめた。見れば案内者の揚君の額からは血が流れてゐるではないか、日本人と見れば無暗に排日氣分が起ると見へる、車窓から眺める街景は古びて雑然としてゐる、苦力の汚い風姿、崩れかけた土塀、グルグルと城内を見物して私達の車は西湖の湖岸岳王廟(岳王の陸墓)の前にピタリと止る。(廟は立派な丁度京都の南禪寺の様な寺)こゝだけは全く地上の樂園である、その風物、遺跡全てが南畫に見る明美な風景である。

私はこゝで杭州並に西湖に就て少し詳しく説明を加へたいと思ふ。

杭州は浙江省の首府であつて人口約百萬を數へる舊都である、杭州が有名であるのは歴史的古都であるばかりでなく西湖がある爲だと云ふ事が出来る、歴史的に見れば古代禹貢の揚州、春秋の越國、隋唐の杭州餘杭郡、吳越の首都西府、南宋の時代には京師臨安府と稱せられ、元朝に至つて杭州と改められ、明清兩朝もこゝを杭州府と名づけて首府とした斯様に歴代の首都乃至要街であつたから歴史的に著はれてゐるのである。特に李太白の

越王勾踐破吳歸 義士還家盡錦衣 宮女如花滿春殿 只今惟有 鵲飛

の如きは吳越時代の華やかなる情景を吟じて餘するところがない。

一段の光彩を與へてゐるのは西湖の佳景である、格別有名なのは西湖を環る十景であつて我が近江八景と云ふが如き所である。即ち

蘇堤春曉、柳浪聞鶯、南屏晚鐘、變峰插雲、花港觀魚、三潭印月、曲院風荷、平湖秋月
雷峰夕照、斷橋殘雪

等で何れも山紫水明文字通りの景勝で蘇州の風物と俱に中國風光の双壁と稱せられるも宣なるかなと感じた次第である。尙ほ右の外の名所に就て述べれば

雲林寺 靈隱山上にあるので別名を靈隱寺とも呼ばれてゐる、此處は西湖四大寺の一つであつて、咸和年間僧慧理の建立にかゝる寺であるが後荒廢のまゝであつたのを順治年間に至つて僧宏禮が重建したが例の長髮賊の亂に際し堂宇殆どを烏有に歸した、後清朝に至つて再建され現在の莊麗なる伽藍を遺してゐるものである。

吳山 一名城隍山と稱せられ、上城中央部にある、昔明の大祖が、提岳萬百西湖上立馬吳山第一峰」と吟つた處で、山上から西湖、府城を俯瞰し、北に江南の沃野、南方に錢塘灣、錢塘江、尚ほ錢塘江を越へて紹興の山嶺を望見することが出来る、之の山上には關帝廟、城隍廟其の外幾多の社廟古刹がある。

孤山放鶴亭 孤山の北麓に在つて、昔し宋の林和靖が鶴を飼つて閑居した處で之の名が遺つてゐるのである、附近には老梅が多く觀梅の名所として有名である。

以上が杭州府、西湖のアウトラインである、吾々一行は黃句車ワゴン(人力車)で右述の各名所を見物した、弘法大師が佛教を研究された遺跡として有名な參天笠へ參拜した時は全く聖師の尊い足跡に頭が下り、身も心も引締る思ひがした、湖岸一周後更にボートで湖を舟遊する、水上から眺めた風景は到底内地では味へぬ別の味はいがある、靄駘模糊として物みな

な全てが春風駘蕩、旅に出て初めてのゆつたりとした氣分にひたる事が出來た。

こつした古代文化の遺跡を持つ支那四億の民が常に奸佞邪智なる奸漢共の爲にまどはされ、排日、抗日に寧日なき有様に對して吾々は義憤なきあたはざる氣概を抱いた。

西湖を横斷して杭州へ戻り十八時二十五分(午後六時二十五分)の一三三特別急行(快車)で上海へ向ふ、杭州驛では政府要人がこの汽車に乗るらしく物々しい警戒振りであつた、出札所、開札所には各々輕機關銃を据付け、プラットホームにも輕機關銃六門をならべ、兩側に拳銃を持った兵卒が堵列してゐる、吾々はその間を通つて乗車するのであつて内地では到底見られぬ異様な情景であつた。斯くて吾々一行は二十二時三十分(午後十時半)無事上海北站停車場に到着した。

翌七日には支那街(城内)を視察に出掛ける、支那街はいつこも同じ雜然たるものであるが、仲々賑やかである、有名な湖心亭の邊りへ行くと益々賑やかで石橋の上では欄干に鳥籠を置いて鳥を鳴かせて得意氣にしてゐる呑氣屋もあつて面白い風景である。又苦力がそこ、こゝにゴロゴロしてゐる、こつ云つた連中が時々便衣隊等に早變りして掠奪、抗日をやるのだから困つたものだ、支那式の公園を視察したがどうも設備は粗末だし何となく汚ない。城

内の中央邊へ行つたと思ふと俄かに銃聲が聞へた、何事かと自動車之急がせると白晝強盜が或る民家へ押し入り巡警と撃ち合ひをやつてゐると云ふ、流弾など中つては馬鹿らしいので早速引返すことゝして城内より佛租界にあるジェスフィールド公園（極司非公園 Jessfield Park）へ見物に行く、仲々堂々たる公園で外人連が可なり多人數散策してゐるのを見受けた、公園の縁の芝生續きにセントジョージ大學（聖約翰大學 St. Johns University）の瀟洒たる校舎がそびゑてゐて繪の様に美しい風景である、これより車を急がせて共同租界へ向ふ、前にも述べた様に上海の街の交通機關は種々雑多で自動車の種類の多いこと、すれちがふ車が殆ど異なつた型である。そしてナンバーは租界用と支那街用との二種のものをつけ甚だしいのになると三つもつけてゐるのがある、租界で認められたナンバーで支那街を通るのは許されず、支那街のでも共同租界は通れないと云ふすこぶるやゝこしいシステムである。其他二輛連結の電車、二階付きバス、トロリーバス、ワンガット黄包車、等雜然として国際色濃厚である。

共同租界の裡でも邦人居留者の密集地帯なる北四川路（North Szechuen Road）を通り江灣路（Kang Wan Road）等を経て、陸戦隊本部を左手に見て新公園へ至る、新公園

（Hongkew Park）は同邦居留民の爲にこしらへられたもので園庭は日本式の香り高く仲々立派である、それより上海神社へ詣でて國連の隆昌、居留民同邦諸賢の安住、發展を祈り更に招魂社にて前回の上海事變戰歿將士の英靈を慰めた次第である、上海陸戦隊本部の堂々たる威容に接して無上の心強さを感じ思はず頭が下る、こゝに吾が忠勇無双の將兵が“備へよ常に”鐵壁の守りを固めてゐるのである。

材木業について少し語ろう。

舊城内を視察の途次私達は黃浦江岸に竝ぶ支那人材木商店を訪問したが、ベニヤ板を取扱ふ店は僅かに二、三店であつて原木商が主である。總じて香港の材木業者の状態と大同小異である。江岸にはジャンクがついてゐて盛んに木材が水揚げされてゐる、我が國特に臺灣の業者と馴染深い福州の杉丸太とか松丸太類が取扱數量の大部分を占めて河岸の土場に多量積まれてゐる、その積方は丸太の長さに應じて兩頭肩間に杭木を打ち立てゝその間に極めて順序よく積上げるのであつて仲々見事である、そして丸太の末口には白ペンキで寸銘が凡てに亘つて之又綺麗に書き入れられてゐる。ベニヤ板に就ては未だ幼稚であつて日本品と北支天津及び上海のジャンタイの製品が取扱はれてゐるに過ぎないが將來は相當

注目すべき市場性を持つに至るであろうと観察した。

斯くして私共一行は八日夜ヨーロッパから寄港の郵船榛名丸に乗船し、翌九日早朝する様に黄浦江を南下して東支那海へ出て海上二日の後十一日午後七時神戸港へ安着したのである。

出迎への日神海運の辻村氏、大阪滞在中の周一郎、名古屋本店より横井光儀君等各位と共に清談を交へ、その夜の上り急行で名古屋へ向ひ、十二日午前一時四十分無事名古屋驛着、本店及宅より出迎への諸君と驛頭で歡談を盡して、丁度二十一日目久しぶりに我が家の疊の上へ思ふ存分手足を伸した。

之の旅で著者は將來どうしても北支は別として中、南支各方面へ向つて木材及ベニヤ板類の販路を獲得しなければならぬと考へた、支那は全く大きな消費市場であるが木材の合理的消化と云ふ點では時代に遅れてゐると思つた、又日本人の經濟的勢力も上海迄でそれから南へ行くと英人、佛人の勢力が強く日本人の經濟的地位は英、佛人のそれに比して可なり低いと云ふ事を実際に見聞して吾々は木材業を通じて今後之の方面へ一層の努力を傾注すべきだと深く心に銘した次第である。

終りに著者の店に従業する諸君は業務の豫暇を見ては語學（英語、支那語）の勉強をなし、他日こうした大きな消費地へ發展出来る様、その素地を今から造られん事を望んで止まない。